

5.11. IAEA を職場の選択肢として考える人へ：勤務経験から

(2002.2 外務省国際機関人事センターHP<www.mofa-irc.go.jp>への寄稿)

IAEAは米国アイゼンハワー大統領の有名な演説「アトムズ・フォア・ピース」が礎になって一九五七年に発足した。国連組織の一部であるが、独立性を重視した位置づけにある。原子力の平和利用推進とその安全担保が使命である。原子力機関だが、自然科学に限らず、人文科学、社会科学で働く人も多い。国連全体ではなおさらである。その国連は戦争の脅威をなくし、普遍的な平和を達成するための場として創られた。そして昨年、ノーベル平和賞を受章した。貧困、人権、健康等多くの課題について専門機関が連携、横通ししつつ問題解決に当たっている。その多くは「南北問題」である。先進国と開発途上国間の格差解消であり、そのための支援である。開発途上国への愛情と、少しばかりの冒険心があれば誰でも貢献できる。

私はそこで、「原子力を利用した海水淡水化」という課題で仕事をさせてもらっている。人口増、環境汚染、都市化の波で世界の「淡水事情」は深刻化している。無尽蔵の海水から真水を回収する淡水化技術は前世紀半ば実用化され、今ではアラビヤ諸国を中心に定着し必要とする地域は世界各地に広がっている。その海水淡水化にエネルギー源の立場から原子力が貢献する場である。

原子力開発の中で育った私だが、その応用特に熱利用では未経験だった。通算二年程度の海外業務経験はあったが、殊更長い訳ではない「民間」出身の私が国連機関で働く機会を得た。採用側としては、面接時に「英語で論じた」私の意欲を買い、ポテンシャルを「嗅ぎ取った」のだろう。その時の話題は例えば

- IAEA を希望した理由、IAEA に対する提言、IAEA での夢
- いろんな人種と付き合っているか、大勢の前で物怖じしないか
- 現在の担当業務は何か、新しい業務に不安はないか
- 海外経験、特にそのときの仕事（担当）の内容は
- 国際会議で難しいと思った点は、人間関係で大切な点は

元の職場、国の機関特に現地国連代表部の後押しが大きな力だったのは勿論である。私に多少の特徴があったとすれば、「英語での人前での話し方」であろうか。趣味で続けてきた英語クラブでの会議進行役の訓練が採用後の業務にも大いに役立った。学位はある方が有利であり仕事もやり易いが、マストではない。

応募者の絶対数が少ないと聞く。個人レベルでの要因は帰国後の職場と語学力への不安だろうか。雇用契約は比較的短期（当初三年、長くて七年）だからその後の復帰場所はやはり大きな関心事である。職場の上司とよく相談して欲しい。語学力は本人の問題である。「話す書く読む」何れも大事だが、面接では「きれいに話す」、実務では「書く」ことの重要性を実感している。

採用側で応募者を見る要点は、技術経験に加えてその話せる能力、話の内容の誠実さ、書ける能力、自分の意見を持っているか、性格の明るさ、仕事への意欲などだろうか。私はそんな視点で接した。

IAEA生活を一言で振り返るなら、業務に経験が生かせることにやりがいを感じ得たことである。

- 地球規模の問題解決に関わる貢献感が持てる。そこに趣味の英語を含め自分の能力、経験が役立つ。
- 各国の開発方針、政策、技術情報等の最新情報が得易く、世界の最先端にいるとの臨場感がある。
- ここでの経験、人脈、情報が帰国後の職域を広げる。

給料の額面は下がるが、日常生活の質は逆に上がると期待して良い。詳しく例示する余裕はないが交通費、食費等経済的に安く済む社会構造である。職員対象の保険、年金、教育手当や免税特典もある。以前に比べて日本的食材も増えたから生活の不安はない。生活環境も良く自由時間の楽しみも予想通りである。

「国連も働く場所としての選択肢」と考える人がもっと居て欲しい、と思う。公私の生活を通して、異文化に肌で接し、振り返って自分の国を別の角度から見ることができるのは最大の魅力である。

(参考資料として「ばんぼん」から(その1)(その2)(その8の一部)を抜粋添付)